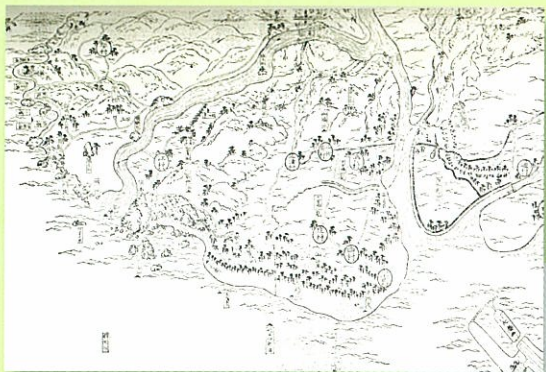


二見松原の昔と今と未来



平成 22 年 3 月

二見地区松林再生計画策定委員会

目 次

- 昔の二見松原・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 今の二見松原・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 未来の二見松原・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20



昔の二見松原

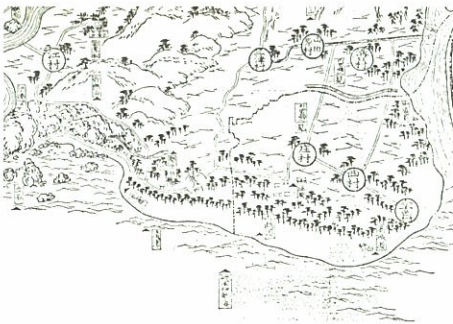
鎌倉時代に二見に庵を構えた西行法師、その大歌人西行を慕って訪れた鴨長明も、ともに二見浦の松を和歌に詠んでいる。

鎌倉時代の初め、西行法師(1118-1190)は豆石山に庵を設けて7年ばかりを過ごした。この時に二見の浦について

浪越すと二見の松の見えつるは
梢にかかる霞なりけり

(二見の松が二つに見える。波がこすためかと思ったが、実は梢に霞がかかっていたせいであると歌っている。

西行を訪ね鴨長明(1155? - 1216)が和歌修行のため、伊勢の二見に向かった。ところが、長明が伊勢に着いたとき、すでに西行は東北に旅立っていた。鴨長明は、伊勢神宮に参拝し、二見の里にもかなり長い間過ごして、「伊勢記」(1207)には二見に関する歌が多く載っている。



「度会河内明細図」、伊勢郷土会(出典：二見町史)

二見瀉神さびたてる御塩殿

幾千みちぬ松かげにして

(二見の浦に神々しくたっている御塩殿、どのくらいの年月、この浦の松かげに鎮座しておられるのであろうの意)

(出典：二見町史)

ここには浜参宮という習慣があった。二見浦一带は清き

渚と呼ばれ、どこよりも清らかな浜辺として尊ばれてきた。古くからその一帯を禊浜(みそぎはま)ともいい、伊勢参宮を間近にひかえた人々はその浜辺で水を浴び、心身を清めみそぎをした所であった。浜参宮とは禊浜に参宮することであり、それを済ませてから、伊勢神宮へ参拝するのが通例となっていた。

(出典：二見興玉神社リーフレット)

江戸時代に二見浦は、浮世絵に描かれ全国から沢山の人々が訪れる所であった。



「諸国名所風景 伊勢あいの山」二代喜多川歌麿・画
(出典：わが町二見)

明治 15 年 (1882) 二見浦は、日本の海水浴場第 1 号となった。明治政府の衛生局長・長与専斎が訪れ、二見浦で海水浴をすることは



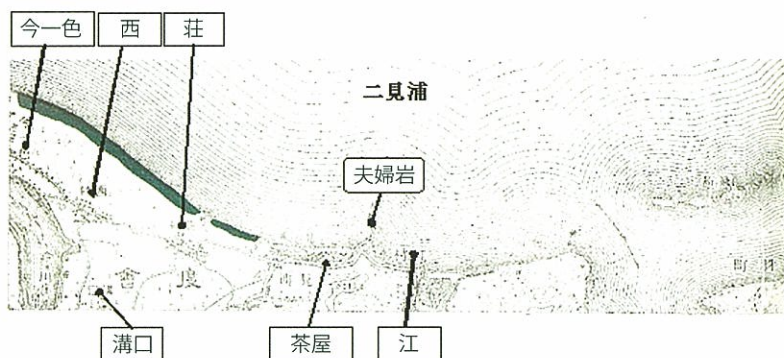
衛生に適しているとたたえ、「日本初」の海水浴場開きが行われた。

(出典：わが町二見)

明治18年（1885）頃に描かれた二見浦真景之図を見ると、波打ち際に縁台や休憩所が設けられ、海水浴客が腰をかけて、旅館で働く女性からお茶を出されている様子がわかる。（出典：わが町二見）



昭和 10 年（1935）の記録によると、この松原は幅 10 ～ 80 間（18 ～ 145m）、延長約 3,000 間（5.5km）、面積約 50 町歩で、20 ～ 70 年生のクロマツ林であった。樹高は 2.5 ～ 8 間（4.5 ～ 14.5m）、最大直径は一尺（0.3m）、平均して 0.3 尺（9cm）。昭和 9 年 9 月 21 日の大暴風の際、この松原により風がかなり弱められ、背後の家屋や耕地は他に比べ被害が少なかったという。



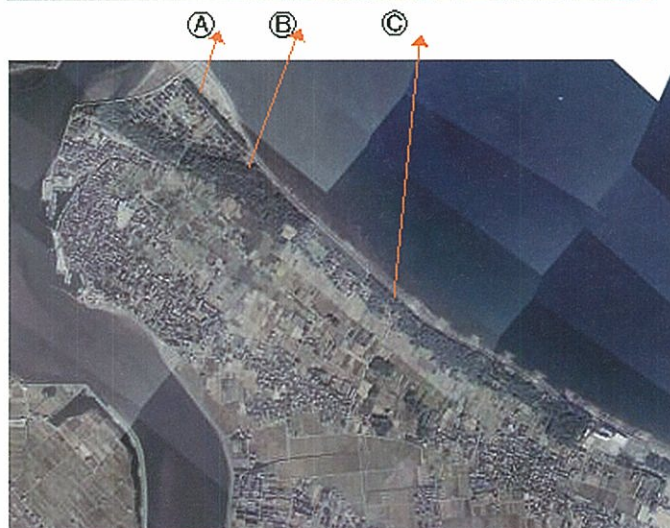
二見浦の松原は伊勢神宮参拝の歴史とともに歩いてきた場所であり、地元の人たちはもとより、全国各地からこの地を訪れる多くの老若男女にとっても貴重な白砂青松（はくさせいしょう）の清き渚として守られてきた。

今の二見松原

平成12年（2000）頃の松林と平成19年（2007）頃とを航空写真により比較すると、二見松原は赤褐色になった、松枯れ被害木が多く目立つ。



平成12年



平成19年



上段・左④平成 21 年 2 月頃
右④平成 21 年 10 月台風後
下段・左⑥広葉樹の優占している地区
右⑥の林況（海側から）

マツ材線虫病の発生メカニズム

マツ材線虫病発生のなぞをのぞいて見ましょう。

病気発生の犯人はマツノザイセンチュウです。しかし、この1ミリにも満たないマツノザイセンチュウは、足も羽もなく、病気の樹からまわりの健康な樹に移ることはできません。ではどうして伝染病のようにひろがることができるのでしょうか、実はこのマツノザイセンチュウを樹から樹へ運ぶ共犯者がいるのです。それがマツノマダラカミキリです。

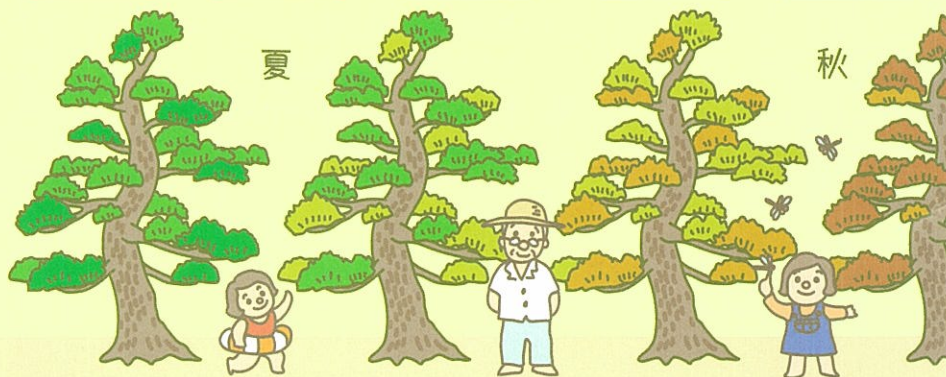
①初夏、マツノマダラカミキリは、マツノザイセンチュウを体内にかかえて元気なマツに飛んできます。※

②大人になるため、若い小枝の樹皮を食べます。このとき、センチュウはお尻の先から小枝に移ります。

③センチュウは、小枝の傷口からマツの樹体内に入り、脱皮して成虫となります。

④センチュウの食害で、健康なマツも1週間後には樹脂が出なくなり、1ヵ月後には葉が赤くなり枯れはじめます。

⑤枯れはじめたマツから出る匂いをかぎつけ、カミキリが集まってきて、産卵します。



※以下「カミキリ」はマツノマダラカミキリ、「センチュウ」はマツノザイセンチュウのことです。

マツノザイセンチュウはマツノマダラカミキリに運んでもらい、マツの樹体内で繁殖しマツを病気にします。マツノマダラカミキリは樹脂（松やに）の出なくなった病気のマツに卵を産みます。卵からふ化したマツノマダラカミキリ幼虫は、マツの枝や幹の樹皮の下の栄養のある部分を餌にします。マツノザイセンチュウとマツノマダラカミキリは、お互いに助け合いながら利益を分け合う、「マツ枯らしの犯行グループ」なのです。

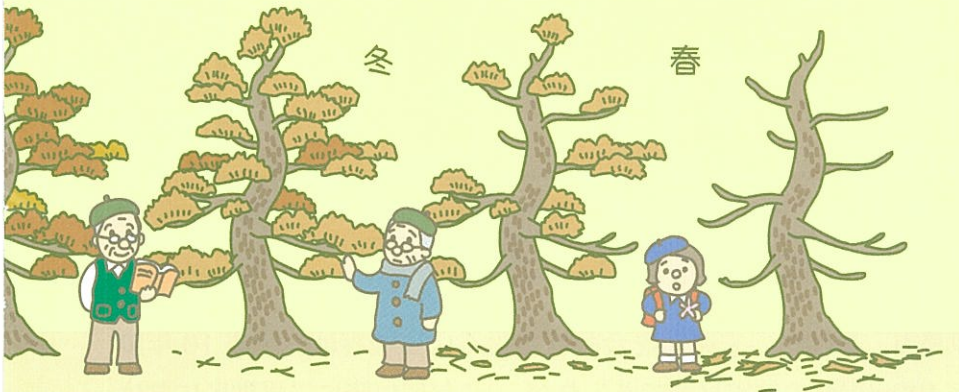
⑥ふ化したカミキリの幼虫は、樹皮のすぐ下の柔らかい内樹皮を食べて育ちます。

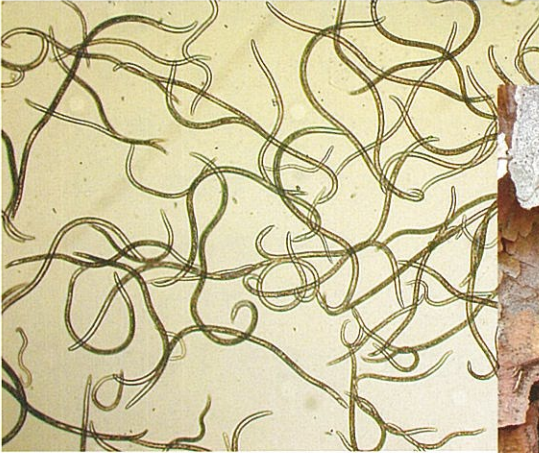
⑦寒くなると、幼虫は材に孔をあけて潜り込み、蛹室（ようしつ：さなぎになるための部屋）を作って冬を越し、春に蛹になります。

⑧蛹室ができると、分散していたセンチュウは、幼虫のはき出す二酸化炭素を頼りに蛹室の周りに集まってきて、カミキリに取り付け準備を始めます。

⑨蛹が羽化すると、センチュウは蛹室に入り粘着性の物質を分泌し、カミキリの腹部の気門内に潜り込みます。

⑩センチュウを腹部の気門にかかえたカミキリは枯れたマツから出て、新しいマツを求めて飛び立ちます。



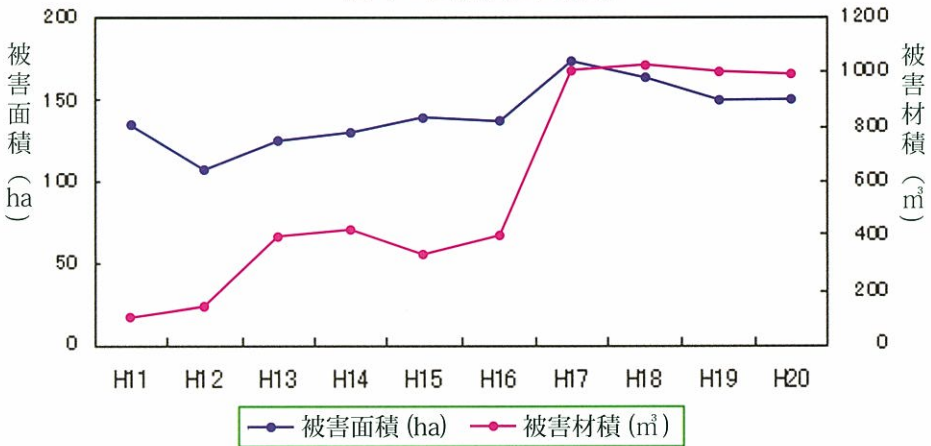


マツノザイセンチュウ



マツノマダラカミキリ

松くい虫被害量の推移



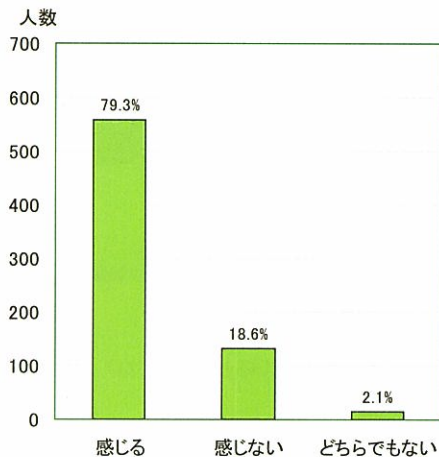
伊勢市、鳥羽市、志摩市を合わせた松くい虫被害は、平成16年度まで400m³程度の被害材積であったが、17年度以降に二見地区における被害が増えている。

このような衰退の著しい松原に対し、二見町の人たちは様々な思いを抱いている。

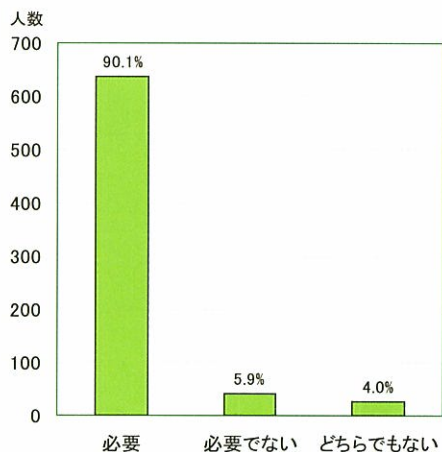
二見町に住む 1,811 世帯にアンケート調査を実施し、755 人（男性 480 人、女性 194 人、無回答 81 人、回答率 41.7%）より回答を得た。79.3%（559 人）の人たちが松林を身近に感じ、90.1%（637 人）の人たちが松林を必要と思っていた。

そもそも、松林は日常生活にどのような役割を果たしているのか、1/4 以上（26.7%）の人たちは家・畑が塩害・強風から守られていると評価、さらに飛砂を防止する（19.8%）、あるいは津波や高潮から守られている（14.8%）と、松林の防災機能を認める声が上位を占め、4 番目に景観（15.9%）の役割を指摘している。

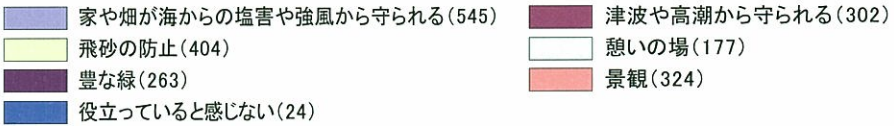
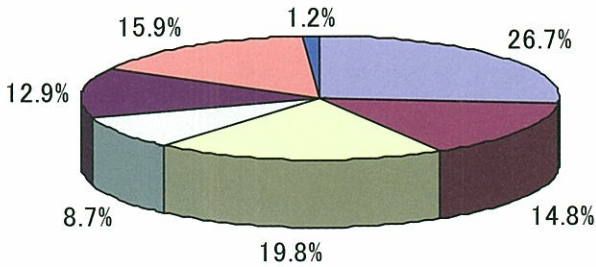
松林を身近なものと感じますか



松林はあなたにとって必要だと思いますか

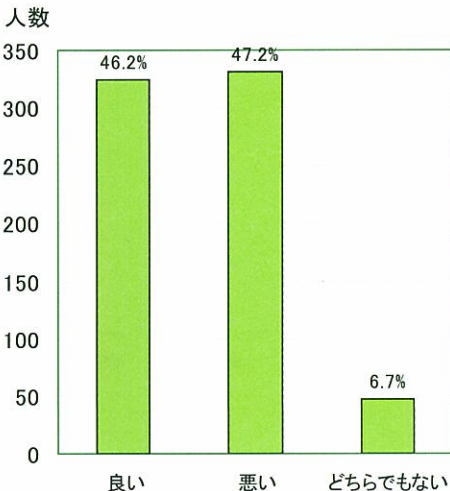


松林機能の評価

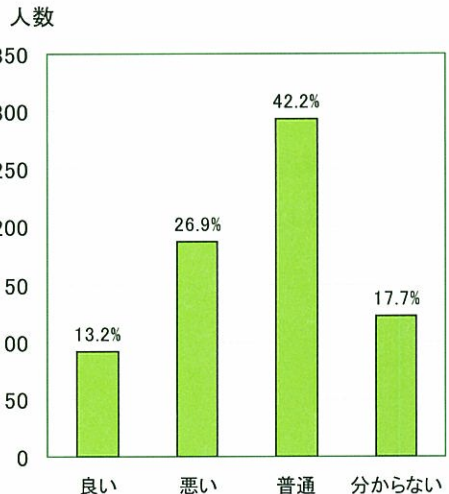


一方で今の松林の景観を良いと思う人を悪いと思う人が上回り、管理状況については、悪いと評価する人が、良いと評価する人の約2倍に達した。

現存する松林の景観は良いと感じますか

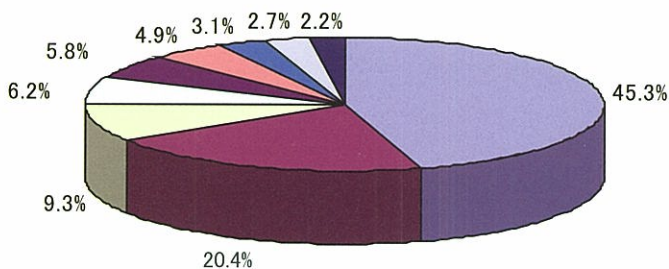


管理状況についてどう思いますか



あわせて、半数近い人たちは松枯れで防風林の機能を果たしていない(45.3%)と考え、間伐や草刈等の手入れ不足(20.4%)や景観の悪さ(9.3%)を問題点としている。

今の松林の問題点



枯れ松で防風林の機能を果たしていない(102)	間伐や草刈等の手入れ不足(46)
景観の悪さ(21)	ごみ問題(14)
その他(13)	松が少ない、雑木林化(11)
松くい虫防除方法及びその後の管理(7)	松以外の植樹を(6)
宅地化(5)	

このように、松林に期待する評価と実際の松林の抱える問題点との間に大きな落差がみられる。今の松林は、地域の人たちが感じている以上に、はるかに衰退し、地元の人たちはもとより、各地から人が訪れる機会を失った、人々の足が遠のいた存在となっている。

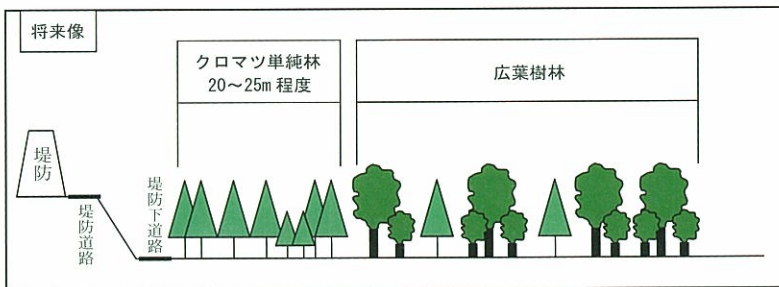
未来の二見松原

二見松原とその前浜は箕獅子舞（みじしまい）の踊り子たちのみそぎの大切な舞台となる。今一色小学校の校歌は昭和43年に作られ、2番の歌詞には、「・・・長官浜の松・・・」と歌われ、長官浜は今一色地区の前浜のあたりを示す。

二見松原は、旧二見町の時代から松林の公有林化が進められ、今10ha、全体の5割程度に相当する。この場所に、未来の二見松原をもう一度作り上げる計画を作成した。

■将来の目標林型

クロマツ単純林と広葉樹林の2つに区域を分け、クロマツ単純林は前線より幅20～25mの区域、広葉樹林はクロマツ単純林より内陸側の区域とする。

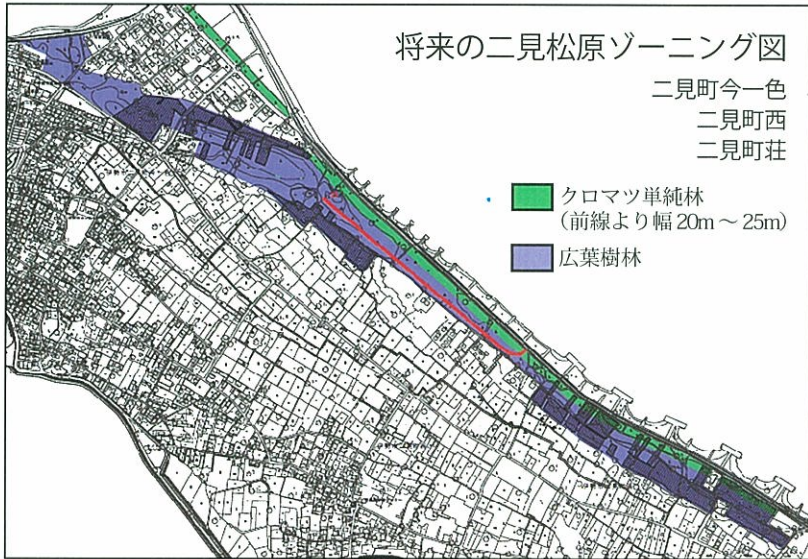


■松林の整備・保全活動

この目標林型をめざすために、松林の整備・保全是、5年（短期）、10年（中期）、20年（長期）の各段階をへて進める。

当初の5年間は、区有地および市有地のとくに保全すべき松林で施業を行い、合わせて私有地所有者へは当計画への理解を求めるための取り組みを行う。松くい虫防除のひとつである薬剤散布について

は、当計画区域全体で行い、より効果的な散布方法を検討する。10年後は、当計画区域の約50%で活動を行い、20年後には当計画区域の100%で活動を行うことを目標とする。



■ 3つの行動施策

①松林の維持管理の基盤づくり

地元が中心となって維持管理を行うしくみづくりを進め、下刈りや立ち枯れ木の処理など、日常の管理や監視を行う管理体制を整備する。

②松林の重要性について理解を深める活動の推進

小さい頃から松林に接する機会を増やすことで、親しみや重要性を認識してもらい、松林の維持管理を行う担い手の育成を進めるための取り組みを、学習活動の一環として地域の小中学校と連携し推進する。

③保全活動の推進

計画区域全体で適切な駆除を行い、現在の松林の景観を損ね倒木する恐れがある立ち枯れ松の伐倒処理を行い、危険防止に努める。

■推進体制

計画の実現に向け、地域住民と行政が中心となって、地域の小学校や中学校、地域外住民の方々等への情報提供や働きかけを積極的に行い、協働による保全活動を推進する。

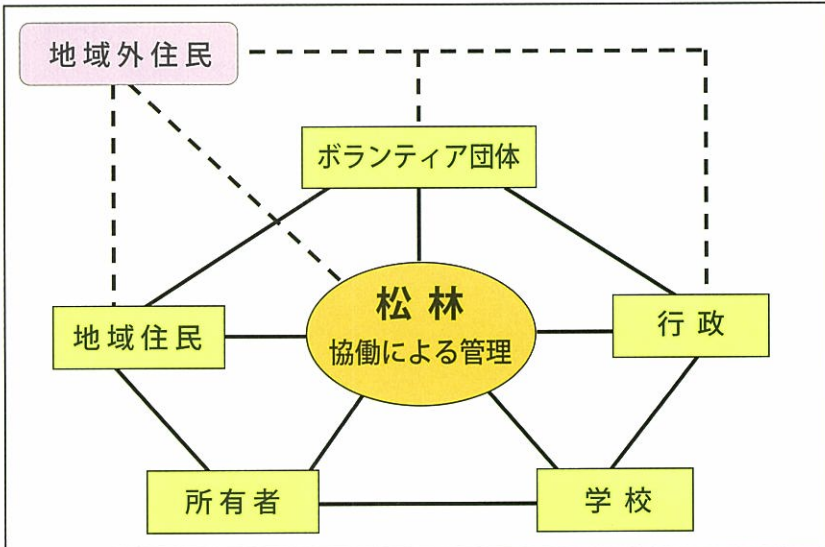


図5 松林管理体制のイメージ



←前線に幅 20～25m のクロマツ
単純林を造成



名勝二見浦のマツ林と一体化→



←昔の禊浜の美しい景観を再生

子供たちの植えた抵抗性クロマツ苗
が未来の松原を形づくる→





←地域の人たちがマツ葉かきをすることで、マツの健康状態が維持される。

二見松原周辺ではエノキ、クスノキ、トベラ、ミミズバイ、ヤマモモ、などによって構成される広葉樹林もみられる。



(撮影者：市川雄二)



「県鳥」のシロチドリは、二見浦の渚でもよく見られ、平成6年には、ふるさと切手に描かれるなど身近な野鳥として人々に親しまれている。

昭和 42 年



昭和 55 年

「おもてなしの空間として、訪れた人々が心休まる松原づくり」をテーマとする松原再生計画を一步一步進めながら、二見松原の再生をめざす。

おわりに

かつて、私たちが子どもの頃は、海岸の松林の中を大勢の仲間たちと冒険したり駆け回ったり、大人たちは憩いの場としての安らぎを求めて松林に足を運ぶなかで、松林に親しみを感じ地域にもたらす恩恵というものを感じとってきました。

時代は移り、人々が松林へ訪れることがめっきりと少なくなり、荒廃の様を呈している昨今、この二見地区の松林の再生のために私たち自らができることは何か、そしてかつてのような関係を取り戻すにはどうしたらいいかを一人ひとりが考え行動していく必要があると思います。

今回策定した計画に沿って、みんなで楽しく取り組み、地域が元気になっていくなかで、いつの間にか昔のような人と松の良好な関係や白砂青松を取り戻していた・・・そんなふうになることを願ってやみません。

最後に、本計画策定のために多大なご協力をいただいた地域住民の皆様、委員の皆様並びに関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

二見地区松林再生計画策定委員会

委員長 田畑春雄

[参考文献]

二見町史編纂委員会 .1998. 二見町史 . 二見町役場, 二見
二見町史編纂委員会 .2006. わが町二見 . 伊勢市二見総合支所, 伊勢
農林省山林局 .1935. 防風林 . 農林省山林局, 東京
(独) 森林総合研究所 .2005. マツ再生プロジェクト . (財) 日本緑化センター,
東京

[写真提供]

(独) 森林総合研究所 秋庭 満輝
日本野鳥の会三重県支部 市川 雄二
伊勢市二見町 長谷川 一馬

この冊子は、「三井物産環境基金」の助成により作成されたものです。

二見松原の昔と今と未来

発行／平成 22 (2010) 年 3 月

二見地区松林再生計画策定委員会

〒 516-8501 三重県伊勢市御薗町長屋 1221 番地

伊勢市産業観光部農林水産課内

電話 0596 (22) 0370

